東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

Analysis of Occupational View of Child Development Care Professionals as Internal career : From the Perspective of Satisfaction and Stress in Their Work

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 里実, 橋本, 創一, 田口, 禎子, 堂山, 亞希, 野元, 明日香, 山口, 遼 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174078

支援者が捉える発達障害児「療育」の役割

── 職務のやりがいとストレスに着目した内的キャリア発達の検討 ──

田中　里実*・橋本　創一**・田口　禎子***・
堂山　亞希****・野元　明日香*****・山口　遼*

Ⅰ　問題

障害児支援は，「療育」と称されることが多く，発達障害児の支援でも同様である。療育は元々，肢体不自由児支援の領域で取り上げられた概念で，今日では発達障害を含む幅広い障害を対象とし，特別の配慮をした方法で関わるアプローチとして広義に捉えられている（尾崎，2016）。ほぼ同義で使用されている用語に「発達支援」があり，例えば厚生労働省が2014年に取りまとめた「今後の障害児支援の在り方について（報告書）」において発達支援は，「障害のある子ども（またはその可能性のある子ども）の発達上の課題を達成させていくことの他，家族支援，地域支援を包含した概念」とされている。いずれも固定的な定義はなく，また指し示す内容も広い概念である。実際に発達障害児療育においても，子どもに対する支援に加えて，家族に対する支援，子どもの在籍する園に対する支援等が包括的に行われているが，特に幼児期の支援においては，車の両輪に例えられるように子ども支援と同等に保護者支援の重要性がいわれる。

本研究では，療育にかかわる専門職（心理士，言語聴覚士，理学療法士，作業療法士，保育士，教諭，児童指導員，社会福祉士等）を「支援者」と総称する。発達障害児療育の支援者は，対人援助職の一つといえるが，対人援助職は高い理想や使命感を持って働く者が多いといわれる（久保，2007）。そのような職務に対する使命感や働くことの意味といった側面は内的キャリアといわれ，職位や給料，職歴といった外的キャリアと共に，職業人のキャリアを構成する要素として位置づけられる（山田，2011）。宗方（2009）は，キャリア発達を考える上で，内的キャリアを重視する傾向が高まってきていると述べており，職務に対する理想や使命感の強い対人援助職においては特に，内的キャリアがキャリア発達に与える影響が大きいことが考えられる。実際，対人援助職のキャリアに関する研究には，看護師や保健師の職業的アイデンティティに関する検討（例えば小路・上野・大川，2018；光岡，2019）や，理学療法士や社会的養護施設職員の職務満足感の検討（例えば鈴木・木村・内田・嘉田，2016，瀧井・伊藤，2021）等，内的キャリアに焦点を当てた検討が多くうかがえる。しかし，発達障害児療育の支援者に関する研究は，支援技法の検討や支援の実態調査がほとんどであり，キャリア発達に着目した研究は見受けられない。一部ストレス等に関する研究はうかがえるものの，その点を支援者の内的キャリア発達と関連づけて検討した研究は見当たらない。発達障害児療育の支援者のキャリア発達の様相を明らかにし，それを支援してい

＊　たなか　さとみ・やまぐち　りょう　東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）
＊＊　はしもと　そういち　東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター
＊＊＊　たぐち　ともこ　駒沢女子短期大学
＊＊＊＊　どうやま　あき　目白大学
＊＊＊＊＊　のもと　あすか　志學館大学
キーワード：発達障害／療育／キャリア発達

くことは，支援の受け手である子どもと保護者の利益にも繋がると考えられ，必要性の高い課題といえるだろう。

これらを踏まえ本研究では，発達障害療育の支援者のキャリア発達を検討することを目的とし，支援者の内的キャリアのうち，特に使命感に関わる点として，療育という自身の職務が支援対象者（子ども，保護者）にどのような役割を果たすと捉えているかを調べる。経験年数による違いの検討と共に，使命感はやりがいというゲインをもたらす一方でリスクももたらしうるという久保（2007）の指摘を踏まえ，職務におけるやりがい及びストレスとの関連からも検討を行う。

Ⅱ　方法

1．調査対象

全国の児童発達支援センターおよび児童発達支援事業から無作為に抽出した504施設において，発達障害の子どもと保護者に対する支援の両方に携わる支援者を対象とした。各施設宛に調査依頼書，質問紙，返送用封筒各2通を送付し，2名に回答を依頼した。その結果323件の回答が得られ，回収率は32.0％であった。うち，回答に欠損のない287件を分析対象とした。

2．調査時期

調査期間は2020年8月から10月であった。

3．調査内容

調査は無記名式質問紙の形式であった。はじめに経験年数を尋ね，次に療育の職務におけるやりがいとストレスの程度をそれぞれ5件法で尋ねた。その後，「1. 療育は，子どもの発達にどのような役割を果たすと感じますか。」，「2. 療育は，保護者にとってどのような役割を果たすと感じますか。」の2項目について，自由記述式で回答を求めた。

4．分析方法

経験年数およびやりがい，ストレスの程度については，単純集計を行った。療育の役割に関する回答内容は，KH Coder 3.Beta.03a（樋口，2020）（以下，KH Coder）を用いて計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは，テキスト型ないし文章型のデータを計量的に分析する方法で，社会科学分野で用いられてきた内容分析に基づく手法である（樋口，2019）。本研究では，分析対象である287名分の自由記述データの全体像を捉える上で，計量テキスト分析が有効であると判断し採用した。分析の前処理として，表記揺れの統一，特定語の強制抽出，使用しない語の設定を行った。その上で，記述内容の概要を把握するため，抽出語リストと共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワークとは，データ中に多く出現した語を確認するとともに，語と語の繋がりからデータ中のトピックやテーマを探索できる手法であり（樋口，2019），共起ネットワーク図では円の大きさが語の出現頻度を表し，語と語を結ぶ線が共起性や関連性を表す。その後，内容を類型化して特徴を検討するため，階層的クラスター分析を行った。

また回答内容が，経験年数の違いおよびやりがいとストレスの程度によって異なるかも検討した。回答者を経験年数で群分けし（新人・中堅・ベテラン），群ごとに各クラスターに関わる記述数を集計した。同様に，やりがいとストレスの程度についても，群分け（やりがい－ストレス高・やりがい高・ストレス高）を行い，クロス集計を行った。

5．倫理的配慮

調査参加者には，調査依頼書に調査の目的，プライバシーの配慮，データの取り扱いに関して説明を記載した。あわせて協力は任意である旨を記載し，回答の返送を以て同意を得た。なお本調査は，東京学芸大学の研究倫理委員会の承認を受けて実施した（受付番号：396）。

Ⅲ　結果

1．回答者の基本情報

回答者の経験年数は最小値0（1年未満），最大値38で，平均6.95年（$SD = 6.69$），中央値は5.00年であった。比較的経験年数の短い回答者が多いことが特徴であった。

また，職務上のやりがいとストレスについての回答結果を表1に示す。「1. 全く感じない」を1点，「5. 非常に感じる」を5点として得点化したところ，やりが

表1　やりがいとストレスについての回答結果

	1.全く感じない	2.あまり感じない	3.どちらともいえない	4.少し感じる	5.非常に感じる	平均	*SD*
やりがい	0	3	13	80	191	4.60	0.63
ストレス	6	29	38	165	49	3.77	0.92

いの平均得点は4.60点（*SD* = 0.63），ストレスの平均得点は3.77点（*SD* = 0.92）であった。やりがいは「5. 非常に感じる」の回答が191件と最も多く全体の67％を占め，「4. 少し感じる」の回答80件も含めると，回答者の94％がやりがいを感じていると捉えることができる。他方，ストレスは「4. 少し感じる」の回答が最も多く165件で，次いで多い「5. 非常に感じる」の49件を含めると回答者の75％がストレスを感じていると捉えられる。

2．子どもの発達に果たす療育の役割

得られた自由記述回答417文について，計量テキスト分析を行った。はじめに，表2に示す通り前処理を行った。特定語に関しては，KH Coder搭載の形態素解析ツール「ChaSen（茶筌）」で形態素として分解されたものの，療育で一般的に使用され，分割せずに複合語として取り扱った方が回答者の示す意を適切に反映していると判断した5語を強制抽出した。使用しない語は「役割」を指定した。質問文に対応して文尾に「○○する役割」と記述した回答が多かったために頻出しており，内容を示す語ではないと判断し除外した。

2．1．回答内容の概要

まずKH Coderにて抽出後リストを作成した。名詞，サ変名詞，動詞，形容動詞それぞれについて，出現回数が上位15位までの語を表3に示す。名詞およびサ変名詞では，「子ども」，「自分」，「保護者」等の人を表す語，「生活」，「社会」，「集団」，等の環境に関わる語，「発達」，「成長」，「自立」等の変化を表す語，「自信」，「自己肯定感」，「スキル」，「コミュニケーション」等の支援内容に関わる語，その他「支援」，「経験」，「土台」，「手助け」等の語が多くみられた。動詞では，「思う」，「感じる」等支援者自身の意見表明としての動詞の他では，「生きる」という語が最も多く抽出された。その他「促す」，「身につける」，「伸ばす」といった他動詞も複数みられた。形容動詞では，「必要」が最も多く，その後は「苦手」，「得意」といった子どもの特性に関わる語が続いた。

次に，抽出語同士の共起関係を示す共起ネットワーク図を作成した（図1）。KH Coderではその共起関係から自動的にグループ化がなされ，結果7グループが構成された。なお，布置された位置や語同士の距離は，関連の強さとは無関係である。以降，斜体の記述は回答の原文を，黒点は該当の抽出語を示す。

グループ1では，「子ども」の円が大きく，出現数が多いことが分かる。それを中心として「思う」，「支援」，「感じる」，「生活」，「発達」の語が共起しており，そこから更に他の語との共起がみられた。「子ども－思う（感じる）」の結びつきは，「子どもに○○する役割だと思う（感じる）。」等，回答者の意思表明として出現しているものが多かった。「子ども－支援」の結びつきでは“*その子に合った支援をすることで，本人も家族も生活が豊かになると思う*”，「子ども－生活」では，“*困難を抱える子どもが少しでも生活がしやすくなった*

表2　計量テキスト分析の前処理（子どもの発達に対する役割）

抽出語（統一後表記）	表記揺れ（統一前表記）
子ども	子供，子，お子さん，児
身につける	身に付ける
関わり	関り

強制抽出語	抽出条件
自己肯定感	（自己＋肯定＋感）
保護者	（保護＋者）
成功体験	（成功＋体験）
基本的生活習慣	（基本＋的＋生活＋習慣）
集団生活	（集団＋生活）

使用しない語
役割

表３　抽出語各15位（子どもの発達に果たす役割）

名詞		サ変名詞		動詞		形容動詞	
子ども	161	生活	70	思う	55	必要	27
自分	42	発達	56	生きる	41	得意	19
社会	42	支援	44	感じる	38	苦手	18
自信	32	自立	35	促す	33	丁寧	11
場所	26	成長	31	行う	29	大切	10
療育	26	経験	27	身につける	25	可能	9
自己肯定感	22	手助け	13	合わせる	23	個別	9
スキル	18	安心	10	持つ	22	豊か	9
集団	18	活動	9	伸ばす	21	好き	6
コミュニケーション	17	関係	9	関わる	20	色々	6
関わり	16	サポート	8	考える	19	様々	6
保護者	16	一緒	8	困る	17	安定	5
土台	15	理解	8	増やす	16	幸せ	4
気持ち	14	影響	6	過ごす	15	困難	4
遊び	13	改善	6	高める	14	不安	4

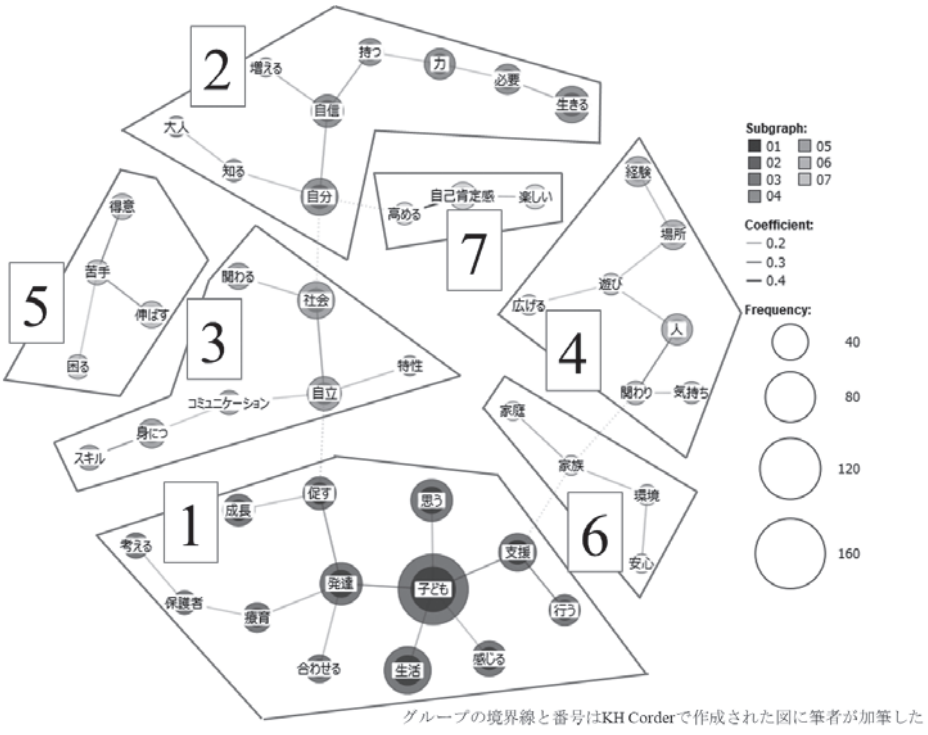

図１　共起ネットワーク図（子どもの発達に果たす役割）

り楽しく過ごせるようになる”，「子ども－発達」では，*“周囲の環境の支援によってお子さんの発達，幸せが変わると信じています*”等の回答がみられた。

グループ2では，円の大きさから「自分」，「自信」，「生活」の出現頻度が多いことが分かる。また「自分」を軸に「知る」，「自信」が共起しており，「自信」から更に「増える」，「持つ」といった語が結びついている。具体的には，*“社会（大人や友達）と関わり，自分の世界以外を知る”，“自分に自信がついて，色々なことにチャレンジしようとする気持ちが芽生える”，“成長していくうえで，自信を持って生活できるようサポートする役割がある*”等の記述がみられた。

グループ3では，「社会」，「自立」の出現頻度が相対的に高く，それらを軸に「関わる」，「特性」，「コミュニケーション」といった語が共起している。*“今の困りごとの解決や将来の自立と社会参加を目指す”“コミュニケーションやADL等社会の中で自立した生活を送れるような力を身につける*”等の記述があった。

グループ4は「人」，「場所」，「経験」の出現頻度が高く，「人－関わり」，「人－遊び」，「場所－経験」，「場所－遊び」といった語が結びついている。これに関わる回答として*“人との関わりが持てるようになる”，“楽しい遊びの中で人との共感関係を築いていく”，“健常の子と同じよう，幼児期に必要な様々な遊びや経験を体験できる場*”等がみられた。

グループ5では，「苦手」と「得意」，「伸ばす」，「困る」が結びついている。*“得意なことや苦手なことを見つける”，“子どもたちの得意・苦手・困り感を把握し，子どもたちの力を発揮できるように支援する役割を担っている”，“得意なところを伸ばしながら苦手なところも伸ばしていき，心身ともに当児に合わせた成長を促す役割*”等の記述がみられた。

グループ6では，「家族－家庭」，「家族－環境」，「環境－安心」が結びついている。具体的な回答として*“子どもも家族も孤立しない環境づくり”，“安心できる環境の中で生活することで人への信頼感を育み，人間関係の基礎をつくる*”等があった。

グループ7は「自己肯定感」が「高める」，「楽しい」と結びついていた。*“成功体験を積み重ねることで自己肯定感を高める”，“褒められた，認められた，楽しかったという経験を沢山することで少しでも自己肯定感を沢山持ってほしい*”といった記述がみられた。

２．２．回答内容の類型化

次に，回答内容を類型化し特徴を捉えるために，出現回数が10以上の名詞（名詞，サ変名詞），動詞，形容詞，形容動詞，副詞（副詞，副詞可能）についてKH Coderにて階層的クラスター分析（Jaccard距離によるWard法）を行った。その結果，デンドログラムから8クラスターが妥当と判断した（図2）。第1クラスターは「自己肯定感－高める」が近似しており，「自己肯定感の育成」と命名した。第2クラスターは「力－必要－生きる」，「スキル－身につける」，「コミュニケーション－楽しい」，「集団－社会－生活」の近似から成り立っており，「社会生活の力と意欲の育成」と命名した。第3クラスターは「気持ち－関わり－人」が近似しており，回答の具体的内容も踏まえ「感情の表現及び制御の力の育成」と命名した。第4クラスターは「場所－経験」，「遊び－広げる」の近似から成り立っており，「遊びや経験の多様化」と命名した。第5クラスターは，「感じる－成長－合わせる」，「自立－促す」，「支援－行う－療育－子ども－発達」が近似して成り立っており，「自立に向けての発達に応じた関わり」と命名した。第6クラスターは「伸ばす－得意－苦手」，「困る－大人－知る」が近似して成り立っており，「特性に合った対応の理解」と命名した。第7クラスターは17語の近似関係から構成されていた。安心できる環境で活動することで自信を持つ，手助けを受けながら徐々に自分でできることを増やす，子どもの発達の土台を育て，できることを増やす等の要素が含まれており，「安心できる環境での発達の土台作り」と命名した。第8クラスターは「丁寧－基礎－大切－関わる」，「家族－家庭－環境－見つける」の近似から成り立っており，回答の具体的内容も踏まえて「丁寧な関わり」と命名した。

２．３．経験年数の違いからの検討

はじめに階層的クラスター分析で抽出された8クラスターの記述数をKH Coderを用いて集計した（表4）。全体で最も記述数が多かったのは第5クラスター「自立に

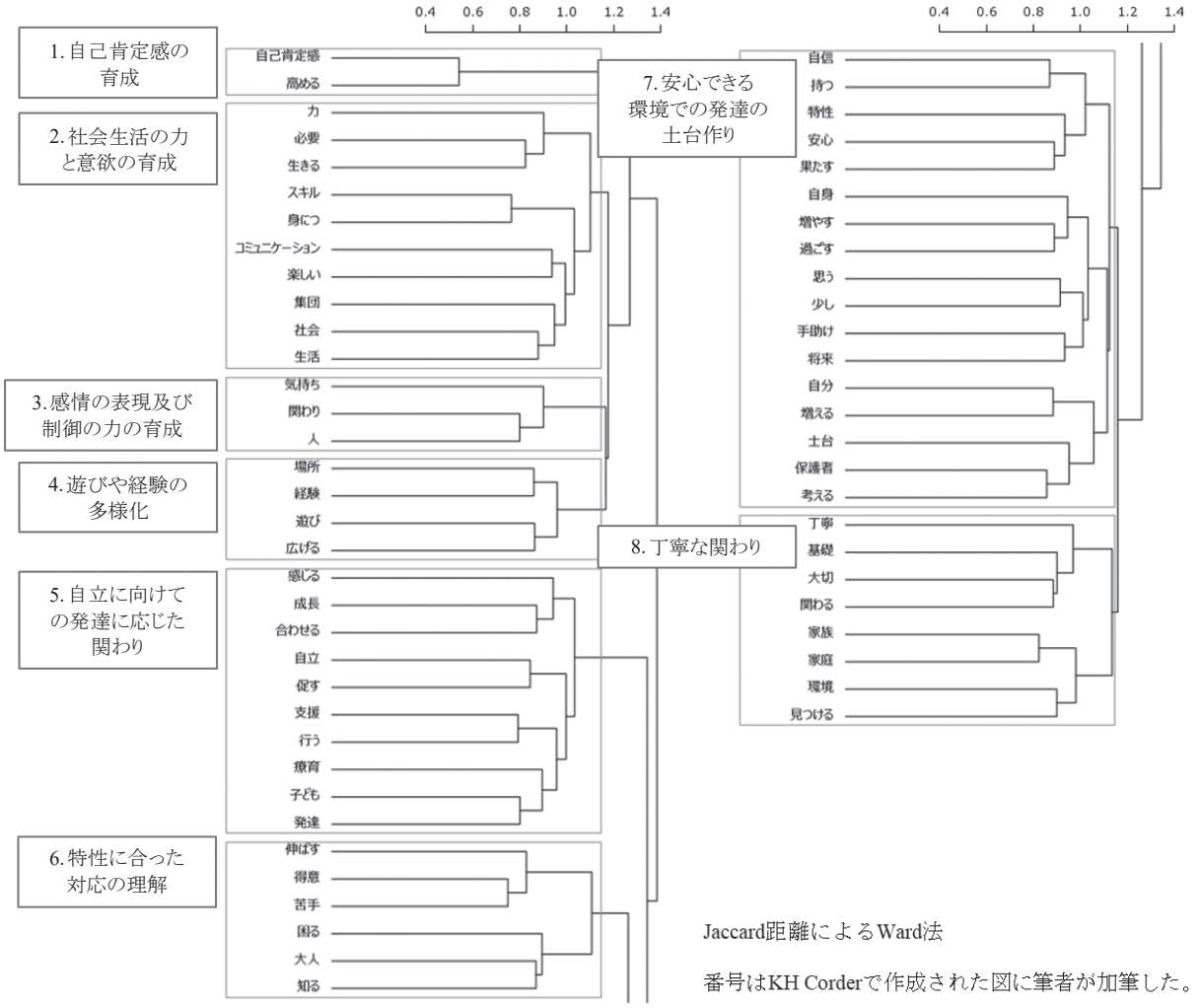

図２　階層的クラスター分析（子どもの発達に果たす役割）

向けての発達に応じた関わり」の227件で，次は第7クラスター「安心できる環境での発達の土台作り」の207件，第2クラスター「社会生活の力と意欲の育成」の185件であった。また，最も少なかったのは第1クラスター「自己肯定感の育成」の24件であった。次にこの結果について，経験年数によって違いがあるのかを検討するため，回答者を経験年数で3群に分けて分析を行った。経験年数1年未満から4年までを「新人」群，5年～14年までを「中堅」群，15年目以上を「ベテラン」群としたところ，新人群が140名，中堅群が102名，ベテラン群が45名であった。表4より，全体として記述数が多かった第2，5，7クラスターはいずれの群においても記述率が4割弱から6割弱程度と高く，その他のクラスターへの言及は1割弱から2割弱程度であった。この結果について，イェーツの連続補正によるカイ二乗検定を行った結果，第1クラスター「自己肯定感」においてのみ群間に差がみられた（$\chi^2 = 6.03, p < .05$）。更に残差分析を行ったところ，中堅群の記述の割合9.52%が新人群の3.94%，ベテラン群の2.99%より有意に高かった（$p < .05$）。その他の第2～8クラスターでは，経験年数によって差はみられなかった。

２．４．やりがいとストレスの程度からの検討

階層的クラスター分析で抽出された8クラスターの記述数について，やりがいとストレスの程度による違いを検討した。はじめに回答者を，やりがいもストレスも高い「やりがい－ストレス高」群，ストレスに比してやりがいが高い「やりがい高」群，やりがいに比してストレスが高い「ストレス高」群の3群に分類した（表5）。それぞれ，やりがい－ストレス高群が199

表４　経験年数とクラスターごとの記述数のクロス集計（子どもの発達に果たす役割）

	1.自己肯定感の育成	2.社会生活の力と意欲の育成	3.感情の表現及び制御の力の育成	4.遊びや経験の多様化	5.自立に向けての発達に応じた関わり	6.特性に合った対応の理解	7.安心できる環境での発達の土台作り	8.丁寧な関わり	ケース数（文数）
ベテラン	2 (2.99%)	24 (35.82%)	9 (13.43%)	9 (13.43%)	35 (52.24%)	9 (13.43%)	37 (55.22%)	10 (14.93%)	67
中堅	14 (9.52%)	65 (44.22%)	20 (13.61%)	16 (10.88%)	74 (50.34%)	23 (15.65%)	64 (43.54%)	27 (18.37%)	147
新人	8 (3.94%)	96 (47.29%)	15 (7.39%)	33 (16.26%)	118 (58.13%)	35 (17.24%)	106 (52.22%)	33 (16.26%)	203
合計	24 (5.76%)	185 (44.36%)	44 (10.55%)	58 (13.91%)	227 (54.44%)	67 (16.07%)	207 (49.64%)	70 (16.79%)	417
カイ2乗値	6.029*	2.687	4.193	2.07	2.24	0.572	3.565	0.47	

$^{*}p < .05$

表５　群分けの基準（子どもの発達に果たす役割）

群	やりがい得点－ストレス得点の組み合わせ
やりがい-ストレス高群	5-5, 5-4, 4-5, 4-4
やりがい高群	5-3, 5-2, 5-1, 4-2, 4-1
ストレス高群	3-4, 3-5, 2-5, 2-4

名，やりがい高群群が72名，ストレス高群が16名となった。

各群の，クラスターごとの記述数のクロス集計を表6に示す。表6より，3群いずれにおいても経験年数群による比較と同様に，第2クラスター2，5，7クラスターに関する記述率が高いことが分かる。この結果について，イェーツの連続補正によるカイ二乗検定を行った結果，第8クラスター「丁寧な関わり」においてのみ群間に有意傾向の差がみられた（χ^2 =5.41 , $p <$ .10）。これについて残差分析を行ったところ，ストレス高群の記述の割合35.00%がやりがい－ストレス高群の16.61%，やりがい高群の13.89%より有意に高かった（$p < .05$）。その他のクラスターでは，群間で差はみられなかった。

３．保護者に果たす療育の役割

得られた自由記述回答435文について，計量テキスト分析を行った。分析前に前処理を行い，表記揺れの統一，強制抽出語，使用しない語を設定した（表7）。

３．１．回答内容の概要

まず，KH Coderにて抽出語リストを作成した。名詞，サ変名詞，動詞，形容動詞それぞれについて，出現回数が上位15位までの語を表8に示す。名詞およびサ変名詞では，「子ども」，「保護者」の2語の数が多く，その他に「一緒」，「共有」，「相談」等のやりとりに関わる語，「子育て」，「悩み」，「成長」，「特性」等のやりとりの内容を表すと捉えられる語，「安心」，「軽減」等の保護者への効果を表すと捉えられる語も一定数みられた。動詞では，「知る」が61回と最も出現回数が多く，似た意味の語として「考える」，「学ぶ」，「深める」等もうかがえた。形容動詞では，「不安」が最も多く，その次は「前向き」であり，いずれも保護者の状態を表す語であると捉えられる。

表６　やりがい―ストレスとクラスターごとの記述数のクロス集計（子どもの発達に果たす役割）

	1.自己肯定感の育成	2.社会生活の力と意欲の育成	3.感情の表現及び制御の力の育成	4.遊びや経験の多様化	5.自立に向けての発達に応じた関わり	6.特性に合った対応の理解	7.安心できる環境での発達の土台作り	8.丁寧な関わり	ケース数（文数）
やりがい－ストレス高群	19 (6.57%)	136 (47.06%)	33 (11.42%)	37 (12.80%)	161 (55.71%)	50 (17.30%)	153 (52.94%)	48 (16.61%)	289
やりがい高群	5 (4.63%)	43 (39.81%)	11 (10.19%)	18 (16.67%)	54 (50.00%)	15 (13.89%)	46 (42.59%)	15 (13.89%)	108
ストレス高群	0 (0.00%)	6 (30.00%)	0 (0.00%)	3 (15.00%)	12 (60.00%)	2 (10.00%)	8 (40.00%)	7 (35.00%)	20
合計	24 (5.76%)	185 (44.36%)	44 (10.55%)	58 (13.91%)	227 (54.44%)	67 (16.07%)	207 (49.64%)	70 (16.79%)	417
カイ2乗値	1.83	3.43	2.61	1.00	1.30	1.25	4.15	5.41†	

$^{\dagger}p < .10$

表７　計量テキスト分析の前処理（保護者に果たす役割）

抽出語（統一後表記）	表記揺れ（統一前表記）
子ども	子供，子，お子さん，児
身につける	身に付ける
関わり	関り

強制抽出語	抽出条件
自己肯定感	（自己＋肯定＋感）
保護者	（保護＋者）

使用しない語
役割

表8　抽出語各15位（保護者に果たす役割）

名詞		サ変名詞		動詞		形容動詞	
子ども	258	子育て	69	知る	61	不安	27
保護者	122	成長	51	思う	47	前向き	10
場所	78	一緒	44	考える	37	得意	8
悩み	53	理解	44	困る	37	必要	8
役割	48	共有	41	感じる	35	安定	7
関わり	35	支援	40	持つ	20	大切	5
家庭	32	相談	40	育てる	16	苦手	4
特性	24	安心	27	関わる	15	好き	4
自分	17	発達	25	学ぶ	13	適切	4
情報	16	生活	20	見る	13	様々	4
気持ち	13	軽減	19	合う	12	孤独	3
療育	13	手助け	13	向き合う	11	色々	3
同士	12	対応	13	深める	11	楽	2
専門	11	サポート	12	抱える	11	気軽	2
方法	11	関係	10	過ごす	10	困難	2

次に，共起ネットワーク図を作成したところ，8グループが構成された（図3)。グループ1では，「子ども」の円が大きく記述数が多いことが分かる。それを中心として「保護者」,「子育て」,「知る」,「関わり」が共起しており，そこから更に他の語との共起がみられた。*“子どもと保護者の関係をスムーズにすることを助ける”，“子どもの現状を知る。知って理解することで子どもも保護者も良い方向に向かうことができる”，“子どもとの関わり方を保育者と一緒に見つける場”*等の回答がみられた。

グループ2では，「理解」の出現頻度が比較的高く，「深める」,「特性」が結びついている。また「軽減」と「深める」,「不安」,「負担」も共起していることが分かる。*“子どもの障害の理解を深め適切な関わり方を学べる”，“子どもの特性を理解し，その子に合った支援を学ぶ”，“子育て不安の軽減，子どもへの理解を深める手助け”*等の回答がみられた。

グループ3では，「悩み」と「抱える」,「共有」が結びついており，そこから更に他の語との共起がみられた。*“保護者の方が一人で悩みを抱えず育児に臨むことができる”，“子育てにおける喜びや悩みを共有できる場”，“他の保護者とも悩みを共有し合える場”*等の回答があった。

グループ4では，「成長」を中心に「発達」,「感じる」,「一緒」が共起している。*“子どもの発達や成長を一つ一つ確認することができる”，“子供の成長，変化を感じることで，子育ての楽しさが増えていくのではないかと思う”*等の回答がみられた。

グループ5では，「家庭」と「生活」が結びついており，*“少しでも安定した家庭生活を送れる手助けとなればいい”，“生活動作など家庭での今の課題や目標を知ることができる”*等の回答がみられた。

グループ6は，「対応」を中心として，「方法」,「良い」が共起している。具体的な回答としては*“困ったときの対応方法を学ぶことができる。”，“子どもの特性を理解し，一緒に子どもへのより良い関わり方や日常*

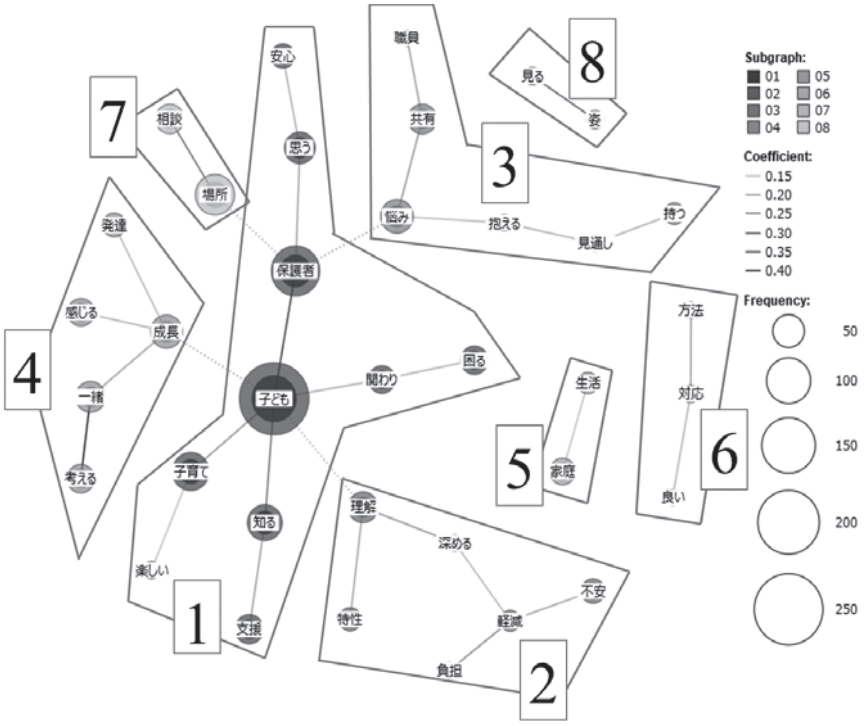

図３　共起ネットワーク図（保護者に果たす役割）

の困りごとへの対応方法を考えていく”等があった。グループ7では，「場所」と「相談」が結びつき，“*子育ての相談の場の一つになること*”といった回答があった。

グループ8は「姿」と「見る」が結びついている。具体的には，“*子どもの姿を違う角度から見ることができる*”，“*成長する姿を実際に見て職員と喜びを共有する*”といった回答がみられた。

３．２．回答内容の類型化

次に，子どもの発達に果たす療育の役割の分析と同様に，出現回数が10以上の名詞（名詞，サ変名詞），動詞，形容詞，形容動詞，副詞（副詞，副詞可能）についてKH Coderにて階層的クラスター分析（Jaccard距離によるWard法）を行った。その結果，デンドログラムから7クラスターが妥当と判断した（図4）。第1クラスターは「一緒－考える」が近似しており，「保護者と一緒に考える機会」と命名した。第2クラスターは11語から構成され，悩みを共有して安心を感じてもらう，相談する場となる，子どもの成長をともに感じるという要素が含まれており，具体的な回答内容も踏まえて「悩みや成長を共有する機会」と命名した。第3クラスターは，「支援－知る」，「特性－関わり－困る」，「方法－対応」，「良い－関係」の近似から成り立っており，具体的な回答内容も踏まえて「特性に合った対応による親子関係の調整」と命名した。第4クラスターは14語から構成されており，生活に活かせる対応について理解し学ぶ，子育てに楽しさを感じてもらえるようにする等の要素が含まれており，「子育て支援」と命名した。第5クラスターは「見る－姿」が近似しており，「子どもの姿を知る機会」と命名した。第6クラスターは「同士－向き合う」，「見通し－持つ」，「情報－抱える」の近似から成り立っており，具体的な回答内容も踏まえて「保護者同士が繋がる機会」と命名した。第7クラスターは11語から構成され，専門的立場として気持ちを受けとめ，保護者の負担を軽減する，子どものことを共に考え，保護者が不安を和らげ前向きになれるようにするといった要素が含まれており，「保護者の心情へのアプローチ」と命名した。

３．３．経験年数の違いからの検討

階層的クラスター分析で抽出された7クラスターの

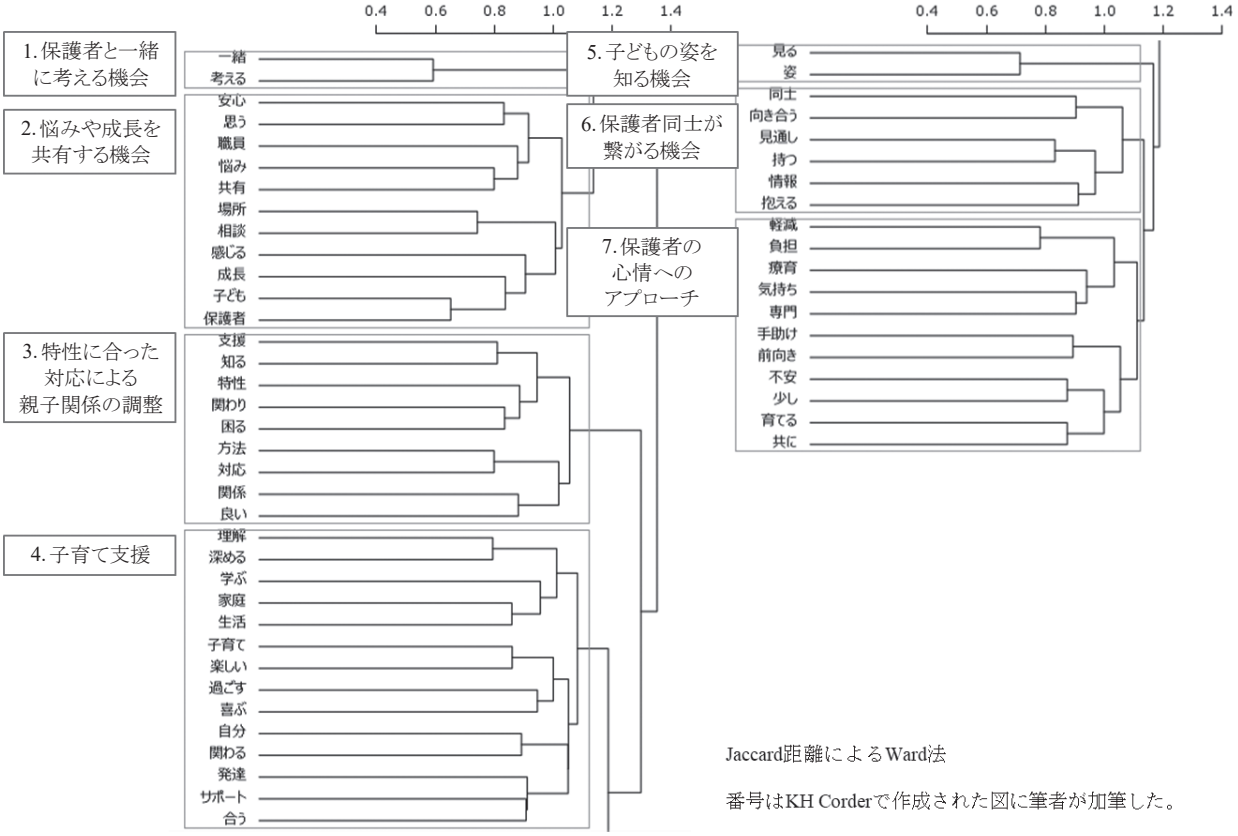

図４　階層的クラスター分析（保護者に果たす役割）

表９　経験年数とクラスターごとの記述数のクロス集計（保護者に果たす役割）

	1.保護者と一緒に考える機会	2.悩みや成長を共有する機会	3.特性に合った対応による親子関係の調整	4.子育て支援	5.子どもの姿を知る機会	6.保護者同士が繋がる機会	7.保護者の心情へのアプローチ	ケース数（文数）
ベテラン	8 (10.00%)	60 (75.00%)	21 (26.25%)	36 (45.00%)	2 (2.50%)	14 (17.50%)	14 (17.50%)	80
中堅	22 (14.97%)	124 (84.35%)	51 (34.69%)	70 (47.62%)	7 (4.76%)	22 (14.97%)	34 (23.13%)	147
新人	25 (12.02%)	167 (80.29%)	88 (42.31%)	103 (49.52%)	12 (5.77%)	29 (13.94%)	64 (30.77%)	208
合計	55 (12.64%)	351 (80.69%)	160 (36.78%)	209 (48.05%)	21 (4.83%)	65 (14.94%)	112 (25.75%)	435
カイ2乗値	1.30	2.95	6.82*	0.49	1.35	0.58	6.12*	

$^{*}p < .05$

記述数について，子どもの発達に果たす役割の分析時と同じ群分けで，KH Coderを用いて集計した（表9）。全体として最も記述数が多かったのは，第２クラスター「悩みや成長を共有する機会」の351件で，いずれの群においても記述率が８割前後であった。次いで第４クラスター「子育て支援」の記述数が209件と多く各群で記述率は５割弱であり，次に第３クラスター「特性に合った対応による親子関係の調整」が160件で，記述率はベテラン群の26.25％から新人群の42.31％であった。その他のクラスターの記述は１割弱から２割程度であった。この結果について，イェーツの連続補正によるカイ二乗検定を行った結果，第３クラスターにおいて群間で有意な差がみられ（$\chi^2 = 6.82, p < .05$），残差分析を行ったところ，ベテラン群26.25%が他の２群より有意に記述率が低く（$p < .05$），新人群42.31%が他の２群よりも有意に記述率が高かった（$p < .05$）。加えて第７クラスター「保護者の心情へのアプローチ」においても群間に有意な差がみられ（$\chi^2 = 6.12, p < .05$），残差分析の結果，新人群の回答の割合30.77%が中堅群の23.13%，ベテラン群の17.50%より有意に高かった（$p < .05$）。その他のクラスターでは，経験年数によって差はみられなかった。

表10　やりがいーストレスとクラスターごとの記述数のクロス集計（保護者に果たす役割）

	1.保護者と一緒に考える機会	2.悩みや成長を共有する機会	3.特性に合った対応による親子関係の調整	4.子育て支援	5.子どもの姿を知る機会	6.保護者同士が繋がる機会	7.保護者の心情へのアプローチ	ケース数（文数）
やりがいーストレス高群	43 (13.65%)	256 (81.27%)	111 (35.24%)	145 (46.03%)	15 (4.76%)	52 (16.51%)	77 (24.44%)	315
やりがい高群	9 (9.09%)	80 (80.81%)	43 (43.43%)	55 (55.56%)	5 (5.05%)	11 (11.11%)	30 (30.30%)	99
ストレス高群	3 (14.29%)	15 (71.43%)	6 (28.57%)	9 (42.86%)	1 (4.76%)	2 (9.52%)	5 (23.81%)	21
合計	55 (12.64%)	351 (80.69%)	160 (36.78%)	209 (48.05%)	21 (4.83%)	65 (14.94%)	112 (25.75%)	435
カイ2乗値	1.47	1.23	2.82	2.98	0.01	2.24	1.40	

３．４．やりがいとストレスの程度からの検討

各7クラスターの記述数について，やりがいとストレスの程度による違いも検討した。回答者の群分けは子どもの発達に果たす役割の分析時と同じ群分けを使用した。各群のクラスターごとの記述数のクロス集計を表10に示す。いずれの群においても第2クラスター「悩みや成長を共有する機会」の記述数が最も多く，その後クラスター4，3の順に多かった。この結果について，イェーツの連続補正によるカイ二乗検定を行った結果，いずれのクラスターにおいても差はみられなかった。

Ⅳ　考察

本研究では，発達障害児療育の支援者のキャリア発達を検討するため，療育という自身の職務が発達障害のある子どもとその保護者にどのような役割を果たすと捉えているかについて調べた。質問紙調査の自由記述回答によって得られたデータを，計量テキスト分析により検討するとともに，経験年数，やりがいとストレスとの関連からも検討を行った。

子どもの発達に果たす役割に関して，共起ネットワーク図および階層的クラスター分析の結果から，支援者は療育という職務を，子どもが自己肯定感を持ち，社会で自立した生活を送れるよう支援する役割があると捉えており，その実現に向けて，その子どもの発達に応じた安心できる環境を保障し，様々な経験や学びができるよう意識していることがうかがえた。支援者は発達障害の子どもの現在の発達状況という「点」だけでなく，その子どもの将来も見据えた「線」で支えていく使命感を持っていると捉えることができる。厚生労働省（2018）の「児童発達支援ガイドライン」でも，「子どもが充実した毎日を過ごし，望ましい未来を作り出す力の基礎を培うために，子どもの障害の状態及び発達の過程・特性等に十分配慮しながら，子どもの成長を支援する」と，将来を見据えた支援が重要としている。本研究で明らかとなった支援者の捉える療育の役割はこれと重なる部分が大きい。佐藤・佐藤・山口・古瀬（2011）は，児童養護施設の職員は被虐待児を過去との繋がりの中で捉え関わっていることが特徴的であると示した。このことより，過去，現在，将来へと続く発達のプロセスのどこに軸を置いて支援を展開していくかは，職種により異なることが想定され，発達障害児療育の支援者の場合，将来に軸を置いた視点で子どもを捉えていることが特徴であると考えられる。経験年数に関わらず，概ね回答の類型が共通していたことを考慮すると，支援者は比較的経験の浅い時期から，将来を見据えて子どもの発達を支援するという使命感を，内的キャリアとして保持しているといえる。

また，やりがい及びストレスとの関連からも検討した結果，やりがいに比してストレスが高い支援者は，丁寧な関わりをより意識する傾向にあることが明らかとなった。このことから，子どもに対して丁寧に関わる意識の強さはストレスの高さに関連する可能性があると考えられる。久保（2007）は，相手を思いやる心や誠実に関わろうとする姿勢はバーンアウトを引き起こす一因になりうると指摘しており，対人援助職は共感性を持って接するだけでなく，冷静で客観的な態度を堅持することも必要であるとしている。これを踏まえると，発達障害児療育の支援者のキャリア発達を支援する上では，丁寧に関わること自体を支援の主眼とするのではなく，子どものどのような将来を見据え，そのために今，子どもにとってどのような関わりが必要であるのかという「点」を明確化して支援できる力や，支援プロセスを体験できるように支援していくこ

とが必要であると推察される。

続いて，保護者に果たす療育の役割について考察する。共起ネットワーク図および階層的クラスター分析の結果から，支援者は保護者に対する療育の役割を，保護者の負担を軽減し，安心感を高めて子育てができるよう支援することと捉えていた。そのために，子どもに合った適切な対応等を教示する心理教育的アプローチと，悩みや成長に共感し，相談しやすい環境を作るといった情緒的アプローチの両者を意識していることも明らかとなった。この特徴は経験年数に関わらずある程度共通していたが，経験年数が5年以下の支援者は経験年数がそれより長い支援者より，保護者の心情へのアプローチを意識している割合が高く，他の要素についても経験年数が長い支援者と同程度の割合で意識していることが特徴的であった。すなわち経験年数の浅い段階の支援者は，広く様々な要素を意識しているといえる。この時期の支援者は経験の少なさから，自身が担当した子どもや保護者がどのように発達，変化していくかという先のイメージを持ちづらく，どのような支援が子どもや保護者にどのような影響を与えるかという実感の結びつきも弱い段階である。田中・比嘉・山田（2015）は，新人看護師の成長プロセスについて，看護経験を通してできることやできないことを見極め，看護観の表明や課題の明確化，理想の看護師像の形成へと繋がっていくことを明らかにしている。発達障害児療育の支援者における保護者支援も同様のプロセスがあることが想定される。

また支援者のやりがいとストレスの程度によって，保護者に果たす療育の役割の捉えに目立った違いはなかったが，ストレスが高いと回答した支援者が多かったことを踏まえると，解釈には注意が必要である。保育の領域においては，子どもに対する支援よりも保護者に対する支援の方が保育者のストレスが高いという報告もあり（木曽，2016），発達障害児の保護者に対する支援に関わる支援者のストレスについてもより詳細に検討することが，キャリア発達を支援する上では重要であると考える。

最後に本研究の課題と展望として，本調査における回答者の偏りについて述べる。本調査の質問紙の回収率は約3割と低く，回答者の多くは療育という仕事にやりがいを感じている層であった。回答の得られなかった7割の支援者が，療育という職務に対しどのような使命感を持ち，やりがいやストレスをどの程度感じていたのかという点を考慮せずに，本調査の結果をもって支援者の全体像を語ることはできないだろう。今後は，調査方法や調査対象を再検討し，広く支援者の姿を捉え，本調査結果と比較検討していくことが必要であると考える。

Ⅴ　引用文献

樋口耕一（2019）．計量テキスト分析における対応分析の活用―同時布置の仕組みと読み取り方を中心に―　コンピュータ＆エデュケーション，*47*，18－24.

樋口耕一（2020）．社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版　ナカニシヤ出版.

厚生労働省（2014）．今後の障害児支援の在り方について（報告書）～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～　https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000051490.pdf　(2021年6月1日)

厚生労働省（2018）．児童発達支援ガイドライン．https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000171670.pdf　(2021年6月1日)

木曽陽子（2016）．未診断の発達障害傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係―バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より―　保育学研究，*54*（1），67－78.

久保真人（2007）．バーンアウト（燃え尽き症候群）―ヒューマンサービス職のストレス　日本労働研究雑誌，*49*（1），54－64.

光岡由紀子（2019）．看護師における本来感と感情労働と職業的アイデンティティとの関連　日本看護研究学会雑誌，*42*（4），749－761.

宗方比佐子（2009）．組織のキャリア発達支援　産業・組織心理学会（編）．産業・組織心理学ハンドブック　丸善株式会社，pp. 77－79.

尾崎康子（2016）．発達障害の療育　尾崎康子・三宅篤子（編著）．知っておきたい発達障害の療育　ミネ

ルヴァ書房，pp. 2－9.
小路浩子・上野昌江・大川聡子（2018）．市町村保健師の経験のプロセスからみた職業的アイデンティティ形成の影響要因―熟練保健師の経験の語りから―　神戸女子大学看護学部紀要，*3*，55－64.
佐藤幸子・佐藤志保・山口咲奈枝・古瀬みどり（2011）．児童養護施設職員が被虐待児とのかかわりを進展させるプロセス　日本看護研究学会雑誌，*34*（5），105－114.
鈴木哲・木村愛子・内田芙美佳・嘉田将典（2016）．理学療法士における職務満足度に関連する因子の検討　理学療法科学，*31*（3），413－418.
瀧井綾子・伊藤大輔（2021）．社会的養護施設職員の養育行動とバーンアウトおよび職務満足感との関連　ストレスマネジメント研究，*17*（1），49－59.
田中いずみ・比嘉勇人・山田恵子（2015）．看護実践における新人看護師の成長プロセス　富山大学看護学会誌，*15*（1），1－16.
山田智之（2011）．キャリア発達を促進する支援　田中堅一郎（編）．産業・組織心理学エッセンシャルズ 改訂三版　ナカニシヤ出版，pp. 213－237.